



図書館とわたし

大学院教育学研究科 1年 川瀬 大樹

手 に入りたい文献があるときはできる限り図書館に足を運ぶことにしている。時間や労力こそかかるものの、実際に書架の間を巡り歩いた末に目当ての文献にたどりつけたときの感動はおおきい。かつて調べた経験のある事柄に系統づいた文献を探すときはその時の記憶をたよりにしながら調べればいいわけだし、最近では、はじめて調べる内容の文献でも大方の目星をつけて探しにいけるようになった。残念ながらいつでも目当ての文献に出会えるわけではないのが玉に瑕なのだがそれはそれで仕方がない。そういう場合に限って、蔵書検索やインターネットでの論文検索を行うことにする。ただ、いつでも時間が十分にあるわけではないので、急を要するときや膨大な量の資料を検索しなければならないときなどはやむをえず最初からコンピュータの力を借りることになるのだが。

そこまでわたしが足を運ぶことにこだわる理由は、文献探しのおもしろみにある。旧書庫をわたり歩いているうちに時間がたつのも忘れてしまい閉館時間に締め出されてしまうというようなこともしばしばである。そういうときは探しにきたもの以外の関係ない文献を読み耽ってしまうことがほとんどなのだが、それが後からしてみればかえって役に立ったなどという幸運なこともあったりする。無駄足を踏むのも悪くはない。

とにかく、便利なものがあるとどうしてもそれに頼ってしまう。文献を探すのはインターネット、取り寄せるのはカウンターでと手早く済まそうと思えば手段はいくらでもある。しかしながらこれらに頼ってばかりではあまりにも味気ない。文献を探す過程で得られるものを考えると少しもったいない気がしてしまう。いや、むしろ文献探しにこそ勉強の醍醐味があるのではないか。

スローライフ、はたまたスローフードなどといった言葉をこのごろでは耳にする。ゆったりとした時間のなかで豊かな生活を志すことをそう言うらしい。時間を忘れて書庫で無駄な時間を過ごすことがとても贅沢なことに思えた。

(かわせ だいき)



図書館のススメ

医学部医学科 4年 吉澤 忠司

私の考える「図書館のススメ」について述べてみたいと思います。
一つ目は勉強に関することです。例えば専門書という類のものは非常に高価です。したがって自分にあった、読みやすい本を選んで購入する必要があります。大学生活を送ってれば何々の教科書がいいといった様々な情報が耳に入ってくると思います。確かに薦められる教科書にハズレは少ないでしょうが、自分にあう教科書は人それぞれ違うような気がします。そこで図書館の本で一度勉強し、そして勉強しやすい本を決めることをお勧めします。

また専門の勉強をしていくうちに気づくと思いますが、一冊の教科書では足りない部分が出てくる場合があります。そういうときにも図書館が非常に役に立ちます。枕にもなりそうな分厚い教科書にしか載っていないとき、わざわざその教科書を買わなくても、対応する部分をコピーすることによって手持ちの教科書に知識を補充することができます。ある教科書ではわかりづらい部分も、別の教科書を読むとすんなりと頭に入ってくることもあります。このように勉強をする上で（お金の節約からも・・・）図書館は非常に役立ちます。

二つ目の図書館利用する際のメリットは様々な分野の本が豊富にあるという点です。弘前大学は総合大学ということもあり図書館には様々なジャンルの本があります。勉強に疲れたときなど自分の専門とは違ったコーナーへ行き、立ち読みしてみるのもいいかもしれません。理系の人なら文系の分野を、文系の人なら理系の分野など、なにか新しい発見があるかもしれません。

最近読んだある数学者の本に以下のようなことが書かれていました。「数学者というのは美的センスが必要とされる。それは文学、古典を読み、感じる心にも通じる。」と。このような頭のいい人は別にしても、他の分野を知ることは自分の視野を広げる、言い換えれば情報の入力口を多くすることにも通じると思います。この情報の入力口を多く持っているというのは今後生きていくうえで非常に重要になってくるのではないのでしょうか。

以上述べたことは少しばかり先に入学した私の一意見に過ぎません。人それぞれ図書館の利用方法は違うと思います。自分にあった図書館の利用方法を探してみてもいいのでしょうか。まずは図書館に足を運んでみましょう。

（よしざわ ただし）

図書館で学ぶということ

医学部保健学科 1年 福地 香



凍えて強張った体が、暖かい空気でゆるむ。ほっと息を吐きながら本の壁の合間を縫って空いている席を探した。人の出入りや足音、本を整理する物音など、決して無音ではないその場所は、けれど不思議に独特な静けさがあってひどく落ち着く。

図書館とは、そういう場所である。勉強を妨げる要素をできる限り廃した、いわば学生の理想郷である。夏は涼しく冬は暖かく、喧騒に悩まされることもない。専門書が揃い、知りたいことは自分で調べられる。深く考えることのなかったそれらのことを、本学に入って改めて考えさせられた。

事実、私が大学生になったのだと最も実感したのは、図書館かもしれない。大学の教室で勉強しようにも、高校と違い自分のクラスがないから、使える教室がわからない。疑問点は先生に聞くほうが早くて楽だと思っていたが、大学ではそうもいかない。職員室というものがなく、研究室を訪ねても在室時間を見計らわないとうまくつかまらない。広いキャンパス内をうろうろしたって偶然見つけてなんかくれやしない。そんなことを、一気に解決してくれたのが図書館であった。

初めて弘前大学の付属図書館に入ったとき、蔵書の種類に息を呑んだ。今まで図書館といえば市立図書館や高校の図書館しか知らなかった私にとって、本棚にずらりと並ぶ専門書の背表紙の数々は圧巻だった。「自分で学ぶ」の意味を初めて深く考えた。そうして気づいたのは、ここでは「自分で学ぶ」のではない、「自分で学べる」のだ、ということだった。

学べるのだ、自分で。快い環境で、先生を探す前に、自分が好きなこと、それもたとえ自分が専攻していない分野であったとしても。医学部保健学科の私が、1960年代の貴重な医学雑誌を引っ張り出すことはもちろん、井原西鶴の研究書を借りようが現代教育についての本を読もうが、誰も咎めない。構わないのだ。大げさかもしれないが、眼から鱗だった。

今、それに気づいた私には、知りたいことが山ほどある。意欲だけが先走って行動がなかなか伴わないのだが、今はその、膨大な知識の海から好きなだけ知識を汲み取れる喜びを、じんわりと噛み締め始めている。

(ふくち かおり)



読書について

理工学部数理システム科学科 4年 中野 耕一

弘 前大学附属図書館概要 2005 によると、図書館の所蔵図書冊数は本館で 61 万冊、医学部、保険学科各分室合わせると 79 万冊を超えています。所蔵雑誌の種類に至っては 2 万 3 千種類。しかし、一人の学生としてこの数字を聞いたとしても、それは全く驚くべきことではないでしょう。なぜなら、図書館にある何十万冊の内、自分の勉強に関わってくる本は数十冊（多い人ならプラス百冊くらいなのかもしれません）、雑誌なら十数種類くらいで、さらにその中でもまともに読み切れる冊数となるといくらでもなくなってしまいうだろうということが予想できるからです。もちろん、実際に読みきれた本がもっとずっと少なかったとしても、たいした問題ではないと思います。勉強における本の選びで重要なのは、とにかくたくさん、すべて読み切るのではなく、自分に必要なものを必要な分だけ見つけ出して確実に読み切るということです。

さて、話が変わりますが、私が最も本を読んでいた時期は小学生のころだったというのは間違いないでしょう。通っていた小学校の図書室はあまり広いとは言えず、もちろん他の小学校がどの程度かわからないので比較はできないのですが、6 年間がんばれば図書室にある本すべてを読むことができるかもしれないという程度でした。半ば、本をすべて読むという目的で読書に励んでいました。中学に上がり、図書室は広く、本は多くなりました。高校になると本がより多くなりました。しかし、読書に割ける時間はずっと少なくなりました。本の量だっがんばれば 3 年間ですべて読めるなどというレベルではなくなりました。こうして、成長するほどに読むことができる本が増えていくのに、読むことが難しくなっていく、私と本との間にある距離はどんどん広がっていくのです。

自分と本との間にある距離を知った上で、蔵書 79 万冊という数字、それは驚愕以外の何者でもありません。卒業すれば、大学を離れば読む機会を失ってしまう本が大部分でしょう。勉強の目的で読まなくてはならない本が限定される一方で、勉強を忘れたとき、私達の前に読まなくても良い本は一冊だってありません。それなのに、本との間にある溝は深まる一方。しかし、自分と本の距離がどんなに広がっていても、手を伸ばせば簡単に取ることができる本は必ずあるということをお忘れはいけません。そして、一人で読みきれないからといって諦めることはありません。自分が読めない本は、他の人が読んでくれればいいのです。そうして、自分の知らない本の話聞いて、人が知らない本の話をしてみましょう。きっと、読むことのできない本との間にあるはずだった距離は見えなくなってしまうことでしょう。

(なかの こういち)